地理学報告　第49号　36～41　1979

近世伊勢国山田の御師町

——下中之郷町——

中　村　和　行*

近世の伊勢国山田は産業神豊受大神をまつる「外宮」の鳥居前に発達した門前町である。人口は約2.5万人[1]，神社神道の本拠でもあった。本来，門前町は中世的な存在といわれるが，近世における「山田」は「御師」が全国に信仰圏を拡大させながら宗教的機能を特化させた結果として，大発展をみた宗教都市である。

ここでいう「御師」とは御祈禱師とか，御詔刀師を意味する略称であって，当地では師職や大夫の名でも呼ばれてきた。当初，「伊勢神宮」は天皇家の氏神として，一般の私禱は厳禁されていたのであるが，東国武士が抬頭する鎌倉時代に解禁され，御師の活動が認められたのである。

これが実際は「昨日大神宮権禰宜度会正倫（相鹿二郎大夫）自二本宮参着一、是為レ致二御祈禱一賜二御願書一源頼朝也[2]」とみえ，権禰宜相鹿二郎大夫度会正倫が東国帰伏をねがう源頼朝のために私禱をうけおったことがわかっている。

このような風潮は，戦国時代から江戸時代にかけて急速に普遍化し，御師活動は民衆レベルにまでおよんだと考えられる。

一方，世情の安定と平行し，諸国への旅が大衆化すると，御師たちは「宮川の渡し」まで参宮人を出むかえに「手代」をつかわし，山田にあった自宅（宿坊）に参宮人を宿泊・饗応し，お神楽をあげ，名所にも案内した。また，帰りにはお祓大麻を領布し，彼らからお初穂料を項載し得分としていたのである。

御師の職掌としてはこの他に，「山田三方」としての町方の支配・山田羽書の発行・市および座の支配・宮川渡船の管理などをあげることができる。

このようなことで「山田」居住の御師はまた，町のリーダー的存在であった。

本稿は以上の点から，御師活動に視点をおき，外宮鳥居前地域に御師町を構成していた伊勢国山田のうち「下中之郷町」を中心にして，その集落景観を復原し，あわせて，町の性格を明らかにしようとした。

I　御師町「下中之郷町」

古昔「山田」は20組町から成るが，その西部一帯については，筋向橋より以西は「上之郷」，上中之郷町と下中之郷町が「中之郷」，岡本町と吹上町と岩淵町を「下之郷」と称し，その後「中之郷」が上と下に分けられたのである。この場合，各町の「御師」について，図1は安政3（1856）年の御師数と嘉永3（1850）年の戸数を算出し，町別の御師率を図示した[3]。この結果では，鳥居前に近接した「田中中世古町」が最も高率であり，この町を中心とし，周囲にむかって低下する圏構造が認められた。

下中之郷町の場合，御師率10%以上15%未満の高率地域であった。そして，相当数の町屋を混在することなどの特色が指摘できていた。なお，時代は若干さかのぼるが，「安永6丁酉（1777）年改　師職檀家諸国家数帳」を検討すると，「山田20組町」の中で，下中之郷町は御師数39人（2位），総檀家数315,732軒（6位）となっており，「御師町」としてかなり古くから優位な地位にあったことが知られる。

*東郷町立音貝小学校

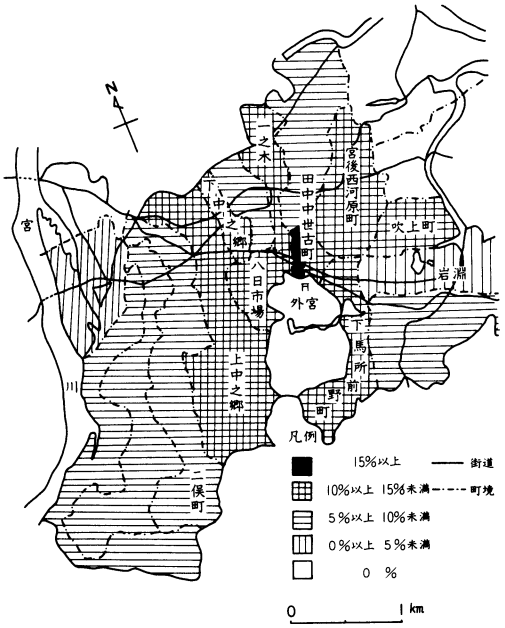

図1　近世山田の御師率

また，御師率の高かった他の町として岩淵町・宮後西河原町・八日市場町・上中之郷町をあげることができた。この場合，岩淵町・八日市場町・上中之郷町の3町では檀家数が10万軒を越える大御師[4]の居住がみられ，彼らが山田全体の御師活動をかなりリードしたことを注意したいと思う。そして，以上の3町では檀家数が他町と比して卓越するわりに，御師数が意外にすくないことも知られたのである。

けれども，宮後西河原町・下中之郷町では町全体の御師活動は活発であるにもかかわらず，前者より御師数が多く，なかでも大御師以下の檀家数1万軒前後の有力御師が多かった。さらに，前者が大御師による特定諸国の檀家を占有する傾向が強いのに対し，後者は伊勢国と畿内の諸国を中心に多数の諸国において檀家を小単位で獲得してきたという特色が認められる。

II　御師町「下中之郷町」の景観復原

景観復原の方法として，明治期の「地籍図[5]」を基図に，「文化15戊寅（1818）年3月　下中之郷町内絵図[6]」を照合し，前記史料を参照して図2（下中之郷町復原図）を作成した。

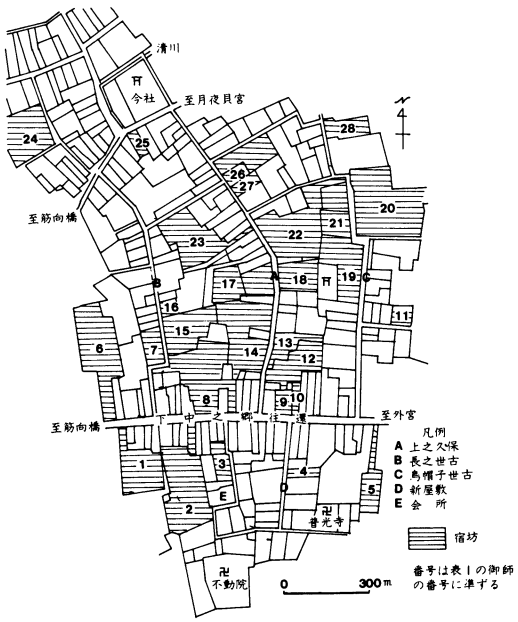

図2　下中之郷の復原図

図2によると，当町は南北に細長い町域をもっており，隣町の上中之郷町筋向橋より鳥居前に至る「下中之郷往還」と筋向橋から左に折れて別宮月読宮に至る2本の街道が東西方向に走っている。さらに，この両街道を南北に連結する小道（西側から順に長之世古・上之久保・鳥帽子世古）が3本あることを注目したい。この場合の町筋は，「宇治山田市史[7]」によると，南北の小道を「世古」，東西の狭い小道を「小路」とよんだともいわれるが，一般的には「迫」と同じく「狭處」の意味から転じたものと解釈したい。

ところで，図3をみると，街道筋の町割が世古に入りこんだ地域の町割よりも一筆一筆において細長く狭いことが明白である。

この場合，文化15（1818）年当時の下中之郷町内絵

図と地籍図が一致しなかった地割が若干あり，御師の屋敷（以下宿坊と称する。）は33軒中28軒しか確認できなかったが，これをみる限りにおいて，下中之郷往還より北側の上之久保，長之世古と鳥帽子世古を結ぶ小路付近や往還の南側で，新屋敷会所小路付近に宿坊が集中していることが判明した。

要するに，前述した御師たちが「宿坊」をいとなんでおり，そして「伊勢講」を結成し，参宮する檀家を収容した関係から，一筆宅地の広い地所を選ぶ必要があったと推定される。ゆえに，御師は往還沿いより，むしろ世古に入った地域に集まったものと考えたい。

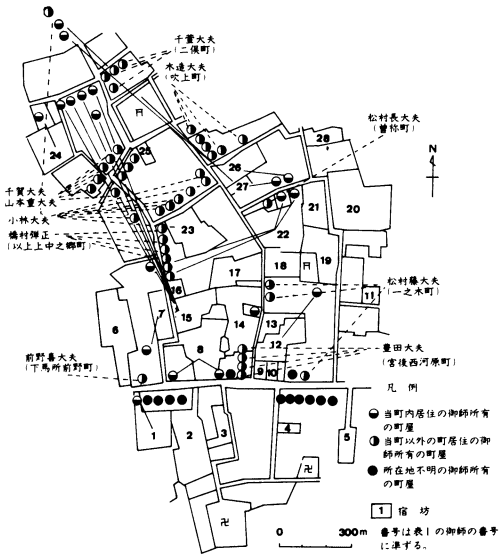

図3　御師所有の町屋の分布

III　御師活動と下中之郷町の性格

確認できた28人の御師について「安永6丁酉(1777)年改　師職檀家諸国家数帳[8]」を用いて，その活動状況を考察してみた。

まず，神宮の正禰宜であり，かつ師職を営む神宮家⑭－松木坂井大夫と，山田三方[9]として自治をつかさどった三方家③－提大夫ならびに年寄家①－結城弥三大夫の3名は，町市において家格の高い御師たちであった。

なお，檀家はいわば御師の財産であったから，多くの檀家をもつ御師は経済的に優位なうえ，町方に対する発言力も強かったと考えられる。

そこで町内において檀家数の多い御師を抽出してみたところ，以下の有力御師の名がわかった。

②－三村大夫は，24,579軒（出雲国）をふくみ42,556軒を持っている。㉓－林周防伝大夫は，12,000軒（土佐国）をはじめ30,721軒を数える。⑳－高田大夫27,174軒と⑧－内山大夫25,956軒も多く，以下1万軒台の御師2人が有力であった。

また，これら有力御師は活動した諸国も多く，内山大夫が9国，結城弥三大夫と高田大夫が8国，林周防伝大夫が6国であり，28人の御師全体の活動諸国数から，御師一人あたりの平均では3国に檀家廻りをしていたことになる。

けれども，檀家数が極めて少ない弱小御師を除いて，御師自身が檀家廻りをしたわけではない。つまり，彼らは配下の「手代」を遣わしていたのである。

換言すれば，御師1人につき平均3人程度の手代をかかえ，これらの人々が周辺の町屋に住む住民だったわけで，御師町の構成主体であると考えられた。

一方，御師は周囲の町屋を所有する場合も多い。下中之郷町においては図3[10]が明示するとおりであった。文化15(1818)年当時の町屋数をかりると，204戸中36.3%にあたる76戸がそれにあたっていた。しかし，下中之郷町の御師により所有された町屋は21戸にすぎず，所在地不詳の御師による13戸を除いた残り42戸は他町の御師に所有されていた。

下中之郷町内で御師に所持された町屋の数と師職名および檀家数を具体化したものが表1である。

これによると，当町内の御師の場合㉒－正住大夫と⑳－高田大夫が5戸ずつ，㉗－森与大夫が3戸，⑧－内山大夫が2戸で，①－結城弥三大夫以下4人が1戸ずつ所有していたことがわかる。

彼らの檀家数を調べると，内山大夫以外，すべての

表1　御師による町屋の所有
下中之郷町の場合

番号	町　名	師　職　名	檀家数（軒）	戸数（戸）
1	下中之郷	結城弥三大夫	2,008	1
7	〃	提　長大夫	2,582	1
8	〃	内　山大夫	25,956	2
14	〃	松木坂井大夫	1,925	1
20	〃	高　田大夫	6,290	5
22	〃	正　住大夫	8,756	5
26	〃	拓植　喜大夫	2,735	1
27	〃	森　与大夫	5,210	3
	〃	岡　村大夫	?	1
	〃	森　大夫	500	1
下中之郷町内居住の御師による所有の町屋　21戸（10.3%）				
	上中之郷	千　賀大夫	42,556	1
	〃	山本　重大夫	11,500	9
	〃	小　林大夫	26,442	9
	〃	橋村弾正	75,193	4
	二　俣	千　萱大夫	17,032	4
	吹　上	木　造大夫	30,610	4
	一之木	松村　藤大夫	12,042	3
	宮後西河原	豊　田大夫	8,310	4
	下馬所前野	前野　喜大夫	?	1
下中之郷町以外の町に居住の御師による町屋　42（20.6%）				
総戸数　76 ただし，所在地不明の御師による所有の町屋13戸を含む（37.3%）				

（注）師職名および檀家数は「安永6丁西年改　師職檀家諸国家数帳」（神宮文庫所蔵），町屋の戸数は「文化15戊寅年3月下中之郷町内絵図」（北村嘉一氏所蔵）により作成した。

御師は2千から8千軒の檀家数しか持っていなかったのである。したがって，他町の御師との格差が問題となる。

他町の御師では，特に上中之郷町の場合が卓越しており，山本重大夫と小林大夫が9戸ずつ，同町の橋村弾正と二俣町の千萱大夫や吹上町の木造大夫と宮後西河原町の豊田大夫が4戸ずつ，さらに一之木町の村松藤大夫が3戸という内訳であった。他町御師のほとんどが有力御師であり，町内居住御師とは対照的であることが注目された。

次に，76戸の町屋の分布を図3で考察すると，下中之郷往還沿いに22戸，上之久保と長之世古をつなぐ小路に16戸，今社付近の街道沿いにあたる出屋敷や浦之橋にそれぞれ10戸と9戸分布していたことが明らかとなった。

以上の考察によって，近世・「山田」の御師活動を通じ，御師町「下中之郷町」の特色を明示することができたので，要約しようと思う。

・神宮文庫所蔵の「安永6丁西年改　師職檀家諸国家数帳」を用いて，各町居住の御師の御師数，総檀家数，活動諸国のべ数を指標に分析したさい，鳥居前に位置した岩淵町・宮後西河原町・八日市場町・下中之郷町・上中之郷町が御師町として優位にあたることから，当時の「山田」の中心であった。また，図1で明らかなように以上の町はいずれも御師率が高く，中心地としての裏づけができた。

・北村嘉一氏所蔵「文化15戊寅年3月　下中之郷町内絵図」と地籍図を基図に下中之郷町を復原してみた。この場合，町内を東西に走る「下中之郷往還」と今社前の街道沿いは町割が狭く，両街道の間，「世古」に入った地域に広い町割が形成されており，これが宿坊の場であった。

・御師町「下中之郷町」は，文化15（1818）年当時に御師33人と町屋204戸がふくまれていることから，御師のほかに多くの住民が混在していた。しかし，御師が町屋の37.3%を所有しており，下中之郷町の御師よりも隣町の上中之郷町の有力御師による所有が卓越していた。

・所有権が御師にあった町屋の分布は，2本の街道沿いに多く，下中之郷往還沿いの他に，「字名」でいえば長之世古，浦之橋，出屋敷に集中が顕著であった。

・下中之郷町の場合，両街道沿い付近に町屋が集中する地域と，両街道の間で特に下中之郷往還よりず

く北側の世古に入った所に集中する宿坊の地域という構造をもっていたことが知られた。

本研究は「近世伊勢国山田の御師集落」として提出した卒業論文の1章とした「下中之郷町」の事例研究を要約したものである。本稿の作成には樋口節夫先生の指導を得たことを付記する。

注

1）1635年当時，総人口23,622人（宇治山田市史。上，P.241より）

2）西山　徳：御師考。「瑞垣」，1977，P.31。

3）御師率（%）$=\frac{\text{居住御師数}}{\text{全戸数}}\times 100$

資料①　松葉大明氏所蔵。安政3甲辰年改山田師職名帳，1856。

同②　藤本利治：門前町。P.14。

4）檀家数の多い御師のこと。

5）伊勢市役所固定資産課蔵。地籍図，明治初年（年代不詳）。

6）北村嘉一氏所蔵。文化十五戊寅年改，下中之郷絵図，1978年調査時作成。

7）前掲1)参考。P.709－710。

8）神宮文庫所蔵，安政6丁西寅年改，師職檀家諸国家数帳による。

9）三方年寄家のこと，山田自治の有力者。

10）前掲6)による。

11）資料①および前掲書6)により作成。

引用文献

1．大島延次郎（1958）：「宇都宮の発達，門前町より城下町へ」。地方史研究協議会編，日本の町――その歴史的構造――所収P.103～111。

2）落合重信（1976）：「部落と寺院」。地方史研究140，第26巻第2号，P.1～13。

3．香川幹一（1968）：「江ノ島門前町の変貌」。地理第13巻第8号，P.125～128。

4．小林計一郎（1958）：「善光寺町の市場」。地方史研究協議会編，日本の町――その歴史的構造――所収，P.211～226。

5．千葉乗隆（1965）：「近世本願寺寺内町の構造」。滝谷史壇55号，P.12～29。

6．中島　至（1968）：「近世堅田の寺内町的性格」。同朋学報，P.249～268。

7．長野　覚（1959）：「宗教集落の一形態，修験道集落英彦山について」。地理第4巻第8号，P.1,050～1,057。

8．中野三郎（1933）：「身延山門前町を中心とした調査研究」。立正大学人文科学研究所研究報告，P.79～130。

9．西山幸治（1968）：「都市史における寺内町」。思想528。

10．平沼淑郎（1927）：「寺院門前町の研究」。早稲田商学第3巻第1号，P.1～11。

11．平沼淑郎（1932）：「身延山門前町調査」。早稲田商学第8巻第2号，P.78～130。

12．藤岡謙二郎（1948）：「寺内町の性格」。人文地理創刊号，P.41～47。

13．牧野信之助（1913）：「門前の研究――能登国総持寺と門前との関係」。歴史地理第21巻第5号，同第6号。

14．三浦鉄郎（1959）：「六郷城下町（秋田県）の成立と寺院招致」。地理学評論第32巻第10号，P.43～48。

15．南雲栄治（1977）：「榛名神社における門前町の復原と変遷について」。都市の歴史地理，歴史地理学紀要19，所収，P.129～160。

16．藤本利治（1970）：「門前町」。古今書院。

17．藤本利治（1976）：「近世都市の地域構造」。古今書院。

18．所　功（1968）：「伊勢神宮」。P.82。

19．藤谷俊雄（1968）：「おかげまいりとええじゃないか」。岩波新書，P.88～89。

20．「日本の町」(1958)。地方史研究協議会編，P.101～112，P.211～226。

21．「集落の歴史地理，続」。歴史地理学紀要10，(1968)，歴史地理学会，P.129～160，古今書院。

22.「都市の歴史地理」。歴史地理学紀要19，(1977)，歴史地理学会，P.129～160，古今書院。
23.「安永6丁酉年改　師職檀家諸国家数帳」。神宮文庫所蔵。
24.「安政3甲辰年改　山田師職名帳」。松葉大明氏所蔵。
25.「式年遷宮御寄付帳」。安政年間年代不祥，松葉大明氏所蔵。
26.「下中之郷町　地籍図」。明治時代年代不祥，伊勢市役所固定資産税課所蔵。
27.「文化15戊寅年3月　下中之郷町内絵図」。北村嘉一氏所蔵。
28.「嘉永7甲寅年改　例年代参御所祈禱並供応控」。松葉大明氏所蔵。
29.「宇治山田市史　上巻」。
30.「伊勢市史」。
31.「津島市史」。
32.「瑞垣112」。神宮司庁，(1977)。